端舟七艘同乗組八舟ニ乗
石火矢六九十挺丁余　内小筒
表方上下両役ニ備　下モノ者
永際ニ並ベ有事候ハヽ
カイノ口ニ人立並ベ兵ひしの
お兵ひ

惣乗組　こる廿人余

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

月十日着岸仕候ニ付而ハ御船并庶船弐艘見掛不申候

高賣船一艘　一乗組四十五人、船頭名セフハリール

一船号　スタットテイル、船重四百七十一ラスト　此船名数六千十六名積

一亡ケレス國女王并フランス國王えの見舞として

差り申候　一和蘭陀先國王去十一月死去仕候　一ヨロシヤ國王

為見舞コロイス國王えさし下候　一イスヘニヤ國中の一枝青誠

ニ御座候　一イサヘンラーと申女王ニ即位仕候　一唐國とエケレ

ス國と二件是迄追々ニも不申模様ニ御座候　一和蘭陀人申参カピタン申ス存和解

右之通船頭并ヘトル阿蘭陀人申参カピタン申ス存和解

差上候　辰六月十六日　大小通詞印

一和蘭陀義八月上旬　皇国六月十日ニ当ル　ニ日遅ニ比ニ而ハ御座候　和蘭國法ニテハカント軍船

一船バレンク同号又ハコルベット四名ホニアス同号國王并ニ船弐艘節句ニ付　又捧書翰

立和蘭國王ゟ　御國ケイスル帝と申訳ニ御座候　公方様ニ被進候

いたし差越候船ニ而ハ無之候ニ付書翰差越候儀ニ御座候　一和蘭陀義ハ利益ニ拘り候義ニ

而ハ無之候ニ付　日本ニ於ての大切ニ仕候儀ニ御座候　一和蘭陀商売筋ニ拘り候義

ニ付書翰之儀ニ付　月日　大小通詞

御代官并諸家軍役衆江ニ而手觸ニ而

一此度渡来之阿蘭陀船ニ而ハ頭役ゟ在留仕候ニ而ハ無之候

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

い書籍を以て陀國之より政道筋之儀ニ付
候の申之越ニ付彼國本國より商賈船ニ而之態と船仕立の
差越候ハいえ申す心右舟当湊へ着岸ニ付六月十九日ニ
七月廿日迄ニ二の致着候様ニ而ハ備場懸りニ差
ニ而ハ御ゆるしの御仕方
辰六月十七日

市中ニ觸書写

一阿蘭陀國之より仕立ニ而船一艘遠ニ当湊ニ入津ニ付而ハ
頭役ニ而当時いえ甲ニ而ハ右中越候船
之儀ニ付ニ而ハ中略ニ而ハ聊ニ而ハ
人ニ而ハ上下常ニ通詞之外ニ
觸書写

辰六月十七日

別紙之通ニ而いえ甲ニ而ハ
第一身元探索ニ而ハ二帯剣ニ而ハ
是ニ差免ニ而ハ
差出ニ而ハ玉薬武器物類ハ
遣ニ而ハ
ニ而ハ
同玉薬武器ニ而ハ
同ニ而ハ
妻子ニ而ハ

此度ニ而ハ陀本ニ而ハ日本國王之の使船ニ而ハ

江入津致い申次間ハ頭役より荒增印証
等陀國法ニ通日本ニて合炮在之い拂
書差出ニ付逐一覽ニ及探改帶劍人別改且端船ニ篷ハ
別帋ニ認ニ兼而申いたし置候通ニ湊内入津ハいたし
いたゞへめ仍場ニ船ニ在之ニ日本國法ニ仍る五菓ハ預け置武器
ニ差ハ撿使見分ニ立差圖致ニ而ハ上意ニ而ハ歸
帆ニ及不申ニ而渡し遣之ニ又本船ニて石火矢打ニ候ハ、其國
法ニ在之ニ日本ニて合圖の如く合炮打候方國法ニ則ニ候
社傳ニ在之ニ而ニ候ハ、別紙ニ認置候使節着岸ニ此見計ニ
ニ而ニ候ハ、船ニ着岸ニ申ニ而

辰六月十七日

添ハ、之ニ仍渡書ニ使節船着次第ニ
申通候ニ而ニ付
別紙ニ仍渡書

今般當湊ニ渡来ニ船ニ國王ニ捧書簡ニ使節
ニ而ニ付為通商ニ訳遣取扱ニ而ニ別ニあニ而ニ
船税義ニ定
外國ニハ其國ニ於ニ船ニ而ニ
合炮數ニ依ニ仍ニ而ニ日本ニ於ニ右ニ
大法ニ背ニ候ニ而ハ不義ニ
ニ通信他國ニ比類ニ而ニ在之ニ仍ニ此地海ニ乗入ニ上ニ

こ法義このお守りの外こ道理あるこ
取るの申立沢こ之義こある叶あ
遣扱いの筋若々届遣そ不法致しこ
使船こ兵用捨厳重この為使
右六月十六日迄こ
二八最早沖こ帆見えの
日こ向い白帆こ注進
くらこて申居こ砲白帆こ注進
こと市中様こ勢ひこまりこ
次第こ

一七月二日和国使節阿蘭陀船
注進こ石火矢沖こ
お至御在城こ
出張御備お
こ通

中山お帳
情検使

旨
杜村源平
女弁両組頭数十人

御徒士目附

阿蘭陀船来
注進こ
御在城こ
出張御備お
こ通

中山お帳
情検使

旨
杜村源平
女弁両組頭数十人

ノ建行丸并御書附

御徒小人目付

一 御船一艘

一 本邦年号阿蘭陀人唐石連沖に出帆在来
国船名 北亢
之刻長崎に碇ヲ入ル速水検
使本国船に乗込ニおゐて
を以て指支人立並ひ出役人御通ひ出帆之義
若使節応対中常体
さて厳重取囲ひ様文字ニ書指置ひ貿人
阿蘭陀支人差添使節ニ指さゝ
上面中村ニ而出国寺ニ通ヒ玉葉ニ不残

下卸ひ取仕舞ひ御海ニ要衝
之義ニ付容易ニ難卸
掛り多数ニ而中ニ女性
其人数ニ人ニ取仕
不ニ滞為ニ仕舞ひ

一 本船長サ 三拾弐丈
〃 幅 七尋
船号 ヲレンジ
バワテン
主役 ハーハーエワエーク又 但年十八才
惣大将

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

乗組凡三百人余（千人）
石火矢五十挺余外ニ大石火矢二挺有之
但上段ニ九挺ツヽ下段ニ十四挺ツヽ

積荷物
九藤　但シ是ハ軍中ニ兵粮ヲ船需動物ニ
玉薬　武器　澤山　但シ是ハ布武ヨリ
兵粮米沢山
麦大豆　是ハ船付ニ
南瓜　酒類

右積候由ニ而ハ定而中ニ
或ハ飛脚船ニ而鳴物抔
用ひの由ニ而人ニ中ニ
一体例ニ通ニ而ハ遠い
如何ニ而南蛮談ニ
一荷ニ世ニ而ハ薬抔人
荷物ニ衣服ニ而ハ
ニ而上ニ屋ハ座敷ニ
趣ニ而ホリモカリ房ニ

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

一筑後有馬様　久留米　三十一万六千石
一肥前鹿津　佐賀様　鹿津城　三十五万石
一松浦肥前守様　平戸城　六万石
右何も長崎御固勢出張被仰付候ニ付、御手当
御人数左之通

一筑前　立花様　柳川　十五万石
一肥前　松平　慶寧様　七万石
一鍋大膳様　鍋島　一万三千石

右何も長崎御固勢出張被仰付候ニ付、御手当
御人数左之通

一筑前様　三十五万石　黒田　右筑前守様御家来数百
被召連　御船手組　御船数百艘
一肥前様　七万石　鍋島　右肥前守様御家来数百
被召連　御船手組　御船数百艘

其外御備之為御人数
一筑前様　立花様　柳川　十五万石
一肥前様　松平　慶寧様　七万石
一鍋大膳様　鍋島　一万三千石

右何も長崎御固勢出張被仰付候ニ付、御手当
御人数左之通

一筑前様　三十五万石　黒田　右筑前守様御家来数百
被召連　御船手組　御船数百艘
一肥前様　七万石　鍋島　右肥前守様御家来数百
被召連　御船手組　御船数百艘

其外御備之為御人数

此国体日心為御固方其外諸掛りニ出役人高
凡数千人

一和ニ入津之阿蘭陀大言湯船
被仕居候ニ付、御役所ニ
為御用下ニ
一追而諸家方ニ而御行掛ニ為出兵
御固之儀ハ御家老書役中御使
を以御伺之上御越可被成候
一武器之類并兵粮米ニ而
御手当之儀ハ

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

一肥後細川掃（伸城籠衆
（卒四万石
（家老惣大将として
組上中国出兵
子石余被附
有之候
由為防禦
一筑前大殿掃（福岡
（五十三万石
入出馬被申付

一鍋島掃（三家并
（分家惣
い掃陣当
い田久掃
い武雄掃

鍋島紀伊守
（蓮城中掃
（七万三千二百石
（四万二千石

右之外寺院江出動
鍋島掃ハ水陸大砲第一軍営
警衛
大村殿掃先遣ヲ出
伸備場ニ入合ヲ上出引
ぬ村濱ニ出張ニ

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

別紙之御書

一西洞市書所内之方に為碇卸之節尤掛使者差

添之事

一湊入之節役所より碇卸之役人江府之指下知

を受申事

一湊内滞船中は別而篝焚お苦

敷候間其御心得可被成候

仍而如件

毎年五月船年行司

江浮

書相改可申事

右之条々堅く相守可申候以上

船仮ニ義書要スルニ付キ
持又為ラレ候ニ付キ
辰七月ニ
右清手形ニ御ヲ下ケ候ニ付キ清書ヲ写シ一七月七日
申ノ刻漸入ル西泊出書所ニ
石火矢御放シ申ス本舟着ス
一七日ノ朝鍋嶋公為ニ吉栄船出ル為沖
出迎見送リ候ニ付キ本舟漸入ル
右出迎見本舟西泊ニ掛ル場ニ
見廻リ両ヶ所ヲ廻ル同九日清書出来一先ヲ

失減ニ御ヤ候ヘ
右清手形ニ御ヲ下ケ候ニ付キ清書ヲ写シ一西泊ニ
日ノ夜沖係場ニ来ル漸入ル西ニ御ヲ下ケ
士ヲ出ス船ヲ通ス備岩ニ掛ル
御ヲ通葉ヶ浜ヲ出ス
備ヲ諸家陣場ヲ
物ヲ備ヲ引ク
勝升降長崎ニ九拾度ヲ
次第ニ御ヤ候ヘ
一本船ニ百五拾人乗組 内三百人ヲ

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

此内沖付家人弐人
洪恍寺沖付家人弐人
船頭沖付家人弐人
黒坊五指人
都合三弐五指人

右之通海法行ようにて抜陳
皆〻案法之者ゟ届取沖付之船ハ
沖中ゟ船番書写ス
一此度ハ案院ゟ国備ニ而一般当湊ニ入津
候ニ付ゟ異船ゟ通高受取ニ而
之義ニ付見物之者共猥ニ出浦
寄り案船ゟ寄廻り候ニ付見物之
名高ク候ニ付未ゟ酉迄ニ而
永城ゟ高四ツ俵ニ而
右之通ニ方ゟ令承知ニ申渡ス
辰七月

右之船ゟ陸ニ海陸共男女見物
陣中ニ而厳ニ取締ニ付
ゟ見物ニ参ル者ハ
弐人ゟ見物ニ参ル者ハ
中ゟ手ニ而出行ニ右之船ハ
中ゟ手ニ而出行ニ

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵